

MRIにより6年半にわたり経時的に観察し得た、 脳梗塞後の遷延化凝固壊死の1例

ひ ぐち しゅう へい
 檜 垣 雄 治¹⁾ 山 口 修 平²⁾

キーワード：脳梗塞，遷延化凝固壊死，MRI

要 旨

60歳男性のMRIにより6年半にわたり経時的に観察し得た，脳梗塞後の遷延化凝固壊死の1例を報告した。症例は，脳梗塞後遺症として外来経過観察中であったが，2005年7月6日に軽度後頭部痛の訴えで来院。頭部CT施行したところ，右側脳室近傍に径3cm大の高吸収域病変を認め，脳出血と診断し，経過観察していたが1ヶ月後の頭部CTでも病変のdensityは不変であり，6年前からのCT/MRIを入手して再検討したところ，この病変は既に5年前から存在していることが判明し，最終的に脳梗塞後の遷延する「凝固壊死」と診断した。この6年6ヶ月の間の頭部MRIを経時的に並べてみると，1)凝固壊死は発症から2年3ヶ月以降でも，画像上の変化を生じていること，すなわち脳梗塞後の頭部MRIで発症から1年3ヶ月後と2年3ヶ月後，6年6ヶ月後ではいずれも病巣の内部が画像上異なっており，T2強調画像上hyperintensityの部分が徐々に小さくなり発症から6年6ヶ月のMRIT2強調画像ではhyperintensityの部分が消失し，全てhypointensityとなっている，2)急性期（本症例では発症から9日目）の画像上，後に凝固壊死になる部分はあたかも脳梗塞をまぬがれ，spareされているように見えるという2つの知見が得られた。6年6ヶ月の長期にわたり，「凝固壊死」の状態をMRI画像を用いて観察し得たのは今までに報告が無く，非常に貴重な症例と考えられる。

はじめに

心原性脳塞栓等の比較的大きな脳梗塞では，いわゆる「凝固壊死」と呼ばれる現象が生じること

がある。すなわち，「HE染色では組織全体がeosinophilicで，神経細胞や血管などの基本構造が同定可能ではあるが，細胞の核は消失しており，細胞体の内部構造は不明瞭となっている状態」のことを言う。梗塞巣は通常1ヶ月を経過すると，壊死組織の吸収がかなり進行して空洞が形成されるようになるが，急速な終動脈の閉塞に起

Yuji HIGAKI et al.

1) 安来第一病院神経内科 2) 島根大学医学部第三内科
 連絡先：〒692-0011 安来市安来町899-1